「破戒」論ノート

中野恵海

一、執筆と出版

藤村の最初の長編小説「破戒」が何日執筆されたかと言う問題については、明治三十八年（三十四歳）三月五日、神津猛氏に宛てた次の様な書簡の一節がよく引用される。

――無遠慮をもかへりみず、生が兄の同情と助力とを乞ひてわが新事業の成立を期せんとせしは、大要左の如き考へに有之候。

一、今回の長編を構成せむと思立ちし当時は、大凡一年（則ちこの四月まで）の見込にて、出京の節は脱稿せるものを携へ印刷に付するの予定にて、函館の父より受けし四百円の印刷費（叢書の基金）にて万事の方法は成立の考へなりしこと。

一、ここに困難を生ぜしは一年の月日にて完成するを得ざりしことに候。御話申せしごとく完全なるものとして脱稿せんには猶半年を要し候。随つて印刷の時日等をも要し候につき、その間家族を養ふの方法なくは折角思立ちし新事業も遂に成立する能はざること。

一、甚だ勝手なる申分ながら、兄にしてもし生を信ぜられ、生の事業を助けむとの厚き御志もあらせられ候はゞ向後三年のあかつきに御返済するの義務を約して（尤も幸にして叢書の売れ方よくば其より以前にも）補助費として四百円を御恩借致し度きこと。

一、確実にして信用ある書籍の出版は必ず得るところありとの当今の読書界と聞及ひ居候。第一の叢書破戒と第二の短編集とを出版するの運びとならば、優に御恩借をつぐなふの余裕ありと信じ居り候こと。

右の文中、新事業とあるのは、同文の終りの方に、第一の叢書破戒とあるのを指すこと明瞭であるから、「破戒」はこれより約一年以前、即ち、明治三十七年四・五月頃から執筆されたとみることが出来る。更に、「函館の父より受けし四百円の印刷費」とあるのは、この執筆開始後間もなく、妻の父奏慶治氏を訪ねてその快諾を得たことを言うのである。当時津軽海峡には露艦襲撃の噂がひろがっていたが、無事に小諸に帰ることが出来て、短編「津軽海峡」（三七・一二・「新小説」）を書いたのである。又、その印刷費（叢書の基金）と言う言葉から推察出来る様に、この「破戒」の出版には作者藤村は自費出

版を決心したのであり、たとへ「確実にして信用ある書籍の出版は必ず得るところありとの当今の読書界と聞及ひ居候」という心境に立っての事とは言いながら、文壇的地位の全く確立されていないままの最初の長編の自費出版と言う事は大きな危険と、したがって、並々ならぬ勇気を必要とした事であった。

幸い、この借金申込みは、神津氏の快諾するところとなり、早くも三日後の三月八日の手紙の一節には、

――御言葉にあまへ左すれば百五十円を御願ひ可申候。これにて小生は五ケ月の間家族を支へ得る見込に候。――

とあり、三月二十日には右百五十円の受取り書を書いている。（四百円が、何故百五十円になったのか理由は不明であるが）。資金の調達に成功した藤村は、小諸義塾の教師を辞めて、大いなる自信をもって、妻と幼い三人の娘を連れて、三十八年四月二十九日上京、郊外の西大保に一家を構へ、所謂、家族ぐるみ背水の陣を敷いて、「破戒」製作一途の生活に精進する訳である。「脱稿せんには猶半年を要し候」と言ったその予定にほぼ間違いはなく、約七ケ月後の明治三十八年十一月二十七日、五百三十五枚の長編は遂に完成した。

――草稿全部完了十一月二十七日夜、長き〳〵労作を終る（章数二十一、稿紙五百三十五）無量の感謝と長き月日の追懐とに胸踊りつつこの葉書を認む。

とは、神津氏に宛てた墨書のはがきの文句である。然し、脱稿後の浄書、校正の手順を経て、その初版千五百部が神田の上田屋から発売されたのは、それより約四ケ月後の、明治三十九年三月二十五日であった。執筆開始より満二ケ年であり、神津氏に「これにて小生は五ケ月の間家族を支へ得る見込に候」と書いてから約一ケ年が経過している。藤村の、そして家族全体の困窮生活は推して知るべきである。

この西大保での、「破戒」の完成をはさむ窮乏生活中に、三人の幼い娘達が次々に死亡するという痛ましい事実が発生した。即ち上京後一週間目の五月六日に三女縫子、「破戒」出版約二週間後の四月七日には次女孝子、ついでその更に二ケ月後の六月十二日には長女緑までが相ついで病死した。この死因については野田宇太郎は、生活窮迫による栄養失調症であると論じ、また、志賀直哉はその作品「邦子」の中で「『破戒』がそれに価する作物かと言ひたくなった。何人かの娘がその為に死ぬといふのは容易ならぬ出来事だ。『破戒』が出来る出来ないの問題どころではないではないかと思った」と書き、平野謙は、夫人冬子の夜盲症をも含めて、事実上の問題として、主人藤村は栄養失調にならず、当時夫人は妊娠中で、人一倍栄養の必要な場合であったとして、広く小説家の執筆と家族犠牲の問題という風な形で問題を提出している。この事に関連して既に瀬沼茂樹の批判があり、脳底脳膜炎（縫子）、急性消化不良（孝子）、結核性脳膜炎（緑）の病名をあげ、「当時の医学としては手の施しようもない死亡で、貧乏生活に拘りのない已むを得ないもの」とするのが多分客観的な正しい判断であり、作者自身にはその短編「芽生」（明治・四二・十・中央公論）に述べられている様に、この小さき者達の死は己れを責める犠牲として受けとめられている様である。

藤村は周知の如く最初、詩人として出発した。「若菜集」が出たの

が明治三十年（二十六歳）であり、翌、三十一年六月には詩文集「一葉舟」を、同十二月には「夏草」を、そして最後の詩集「落梅集」は三十四年刊行されたのであるが、その刊行に先立つ一年前、彼は既に「千曲川のスケッチ」に着手しており、三十五年にはその最初の小説「旧主人」が発表されている。以後、藤村は、信州小諸にあって、教師生活のかたわら、詩から散文への慎重なる「スタディ」を積み重ね、前後七年の間に後に「緑葉集」（四十年刊）として纒められた八つの短編を発表している。そしてこの山上での「スタディ」の総決算、これ等短編の集大成が長編「破戒」であったと解されるのであるが、「緑葉集」の序文の一節に、

——日露戦争が始まってから、予の知人も多く召集された。同僚の教師も兵役に就いた。予が教へた二三の青年も出征した。田舎教師としての予は屢々小諸の停車場に出征の人々を見送って、多くの戦士と家族との悲壮な別離を目撃した。予は遠く山家にあって都の友人等が観戦の企てを聞き、自分も亦た筆を携へて従軍したいと考へたが、遂にその志は果されなかった。そこで予は「破戒」の稿を起した。人生は大なる戦場である。作者は則ちその従軍記者である——斯う考へて、遠く満洲の野にある友人等も、小説に筆を執りつつある予も、同じ勤めに服して居ると思ひ慰めた。

この序文は、長女緑の死から約五ケ月しか経たぬ、三十九年十一月に書かれたものでありながら、尚誇りかな自負の心をもって自らを従軍記者と断言している。このたくましさは後年の「芽生」の中で「私は唯自分の仕事を完成することにのみ心を砕いて居た。『子供なぞは奈何でも可い』多忙しい時には、斯様な気も起った。何を犠牲にしても、私は行けるところまで行って見ようと考へたのである」と書いた心にも通じるものである。前述の、志賀直哉を怒らせたところでもあろうが、私はここでは、両者の気質の相違を云々したり所見を述べたりはしない。唯作家藤村が、自己のすべてを賭けて悔いぬ、「破戒」に寄せたその心を思いたいのである。ともかく「破戒」完成に際する藤村の労苦とその危機はまさに言語に絶する。

二、文芸的価値

前述の如く、藤村が、その生涯に二度と遭遇しない程の大きな危機に立ちながら、自己のすべてを賭けて悔いない大勇猛心をふりしぼって敢行された「破戒」の自費版は幸いにして大成功をおさめた。初版千五百部は忽ち売り切れ、十日で再版千五百部にかかるという、当時としては未曽有の売れ行きをしめした。執筆中から少なからぬ期待をもって待ち受けられていたこの小説の出版は、大いに文壇内外の反響を呼んだ訳で、「早稲田文学」をはじめとして各新聞雑誌は讃辞に近い批評を載せ、いち早く、伊井蓉峰一座はこれを脚色して小山内薫の演出で真砂座に上演するという有様であった。作者が内心深く、すべての犠牲に価すると信じたこの「破戒」は、こうして、藤村の小説家としての地位を確立し、同時に、日本人の手に成った初めての近代文学の成立を立派に物語るという、日本近代文学史上の輝やかしき記念碑的作品となり得たのであった。

それでは「破戒」のどこがそんなに優れているのであろう。と言う点で、先ず第一に挙げられるのは、その文章の新しさであるだろう。

——蓮華寺では下宿を兼ねた。

この簡潔直截にして張りのある文章が、漱石をはじめとして今日に至るまでの読者に魅力を持ちつづけて来ている。藤村が、草稿完成後、直ちにその浄書に懸命の努力を傾注していた三十八年十二月二十三日の神津氏にあてた書簡の一節に、

一句にても、一行にても無駄を減じて、全篇に精神の貫徹するを第一と心懸け居候。

と言う言葉が見える。又この「破戒」が後年露訳された（昭和六年・ソヴエート国立出版局芸術文学部発行・訳者N・フェリドマン女史）時の藤村はその序文の一節に

——私はまた、私達の新しい文学が、既に四十年の歴史を持ってゐることに注意を向けたいと思ふ。この新しい文学が言文一致の運動から始められたことを見逃してはならない。

と書いている。「新しき言葉はすなはち新しき生涯なり」（藤村詩集序）が「破戒」においても極度に発揮されている訳である。今日の若い世代、例えば、大学新入生あたりに紅葉の「金色夜叉」を読んだ者はときいてみると皆無の状態であるに反して、「破戒」の方は案外に読まれている。「金色夜叉」が紅葉の死によって中絶したのは、明治三十五年五月十一日、「破戒」が書きはじめられたのは多分明治三十七年四・五月頃とすれば、その間、わずかに二ケ年に過ぎない。これを更に「金色夜叉」と同時代に書かれた独歩の数々の短編の新しさと思い合わせる時、作品の質自体の新しさもさる事ながら、文章・文体の持つ力の大きさに驚かされる。

第二にはその自然描写のすぐれている点が挙げられる。前述の如く「千曲川のスケッチ」につづく「緑葉集」に収められた諸短編は、「千曲河畔の物語」と著者自ら呼んだ如く、信州の地方色について鮮明な印象を表現しようと心がけたもので「破戒」はその集大成である。「千曲川のスケッチ」の中にある「小作人の家」「千曲川に沿うて」「屠牛」などの小品が適当に潤色されて「破戒」に取り入れられて、それが「破戒」の地方色の根幹をなしている事は周知の通りである。

更に一言したい事は「破戒」の自然描写が信州という地方色をとり入れ、一種の郷土文学的な特色と新鮮さを発揮し作品中の人物や事件の背景として、その環境描写としてすぐれた役割を果たしている事は勿論であるが、登場人物の心理に基いて描かれ、人物の心理、感情の描写の効果をたかめたり、場合によってはそれを代行するという、近代文学のもつ高度の技術がかなりの程度に発揮されているという事である。たとえば、

——動揺する地上の影は幾度か丑松を驚かした。日の光は秋風に送られて、かれ〴〵な桜の霜葉をうつくしくして見せる。蕭条とした草木の凋落は一層先輩の薄命を冥想させる種となった。

これは、丑松が病篤き先輩猪子蓮太郎を心配しながら、それを報じた新聞を人目を避けつつ読むというところで、丑松の心理とこの情景描写がよくマッチして新鮮な効果をあげていると思われる。又、

——新しい自然は別に彼の眼前に展けて来た。蒸し煙る傾斜の気

息、遠く深く潜む谷の声、活きもし枯れもする杜の呼吸、其間にはまた暗影と光と熱とを帯びた雲の群の出没するのも目に注いて、「平野は自然の静息、山嶽は自然の活動」といふ言葉の意味も今更のやうに思ひあたる。一概に平凡と擯斥けた信州の風景は、「山気」を通して反って深く面白く眺められるやうになった。

蓮太郎の、為すあらんとする緊張した気分から眺められた信州の山という風に筆が運ばれている。「破戒」の主題については

――社会の別階級として卑めらるる新平民擯斥の旧思想を骨子として、部落種族の個人と、同族以外の社会全般との扞格に材を採り、一種の新しい個人の苦痛を描かうとしたもの。……個人が内心の根底を衝いて、目覚め来れる生活の願望と、これを圧抑し毀傷せんとする固陋なる社会の旧思想感情との衝突、従っては個人内心の新らしき覚めたる知識と、旧きに従って安を偸まんとする感情との争ひ、そこに生じ来る惨ましき苦痛、これ等を描かんとした。

（早稲田文学記者・明治・39・10号・彙報欄）

との一文は、多少古めかしい表現であるが要領よくまとめられているのではないか。良く言われる如く、信州飯山町の小学校に奉職する優秀な青年訓導瀬川丑松が、その部落出身の身元を「隠せ」という父の戒を守ることによって生ずる悲劇を描くことにあった事に間違いはない。

藤村が小説の執筆に先立って部落の実態をくわしく調査した事は「『破戒』の著者が見たる山国の新平民」（明治・三九・六・文庫）などによって周知の事となっており、その直接の刺戟は、長野師範におきた部落民排斥事件を知ったときにはじまったようである。伊那の高遠辺から出た新平民で心理学か何かを担当して居た一人の講師が特殊部落の出身であることを理由に教壇を追われ、その後もおなじ理由で二、三の学校を転々としたのち、ある中学の校長にまでなったらしい。

――其人に私は会ったことはないが、新平民としては異数な人で、彼様いふ階級の中から其様な人物の生れたといふことが、ひどく私の心を動かした。それで其人のことを聞き得らるる限り聞いて見て、実に悲惨な生涯だと想ひ浮べた。

――畢意彼様云ふ風に世の中から嫌はれて居る特別な種族だから、独立した事業といふ方面には随分是迄でも発達し得られたのだろうが、知識と云ふ方の側に左様いふ種族が発達し得るか奈何か。それが私の深い興味を惹いたのであった。

同じく、「山国の新平民」よりの引用であるが、これが「破戒」の動機である。そしてこの文章から推測し得られる特徴は、先づ藤村の関心は、不当に差別されて苦しんでいる部落民達を社会構造の内部に於て捉らえるとか、部落解放への情熱（猪子蓮太郎の如き）とかへ向う前に、一人の人間に対する「実に悲惨な生涯だ」と歎ずる事にとどまる気配がある事が一つと、藤村が持っている観念、部落出身教師に働哭して書いた「破戒」の著者自身が尚差別観念を可成りな程度に於て持っていた事を示す様である。同じく「山国の新平民」中にある、

――信州で深く懇意になって「破戒」の出版に尽力して呉れられた志賀の神津猛氏、彼の人の細君はお蝶さんと言って、その人の叔母

に当る塩川鉄砲店のお弁さんといふ人が「破戒」を読んでからは、もう穢多のことは悪く言ふまいとさう言はれたとかで、先頃神津氏が来て私に話したことがある。斯ういふ風に憐れむといふ心で見てくれた読者も随分あったらうが、中には又、穢多を主にした物語だから、あまり好い心地はしなかったと言はれる読者も多く有るだらうと思ふ。

という文章などはその事を如実に示す。終りの方の文章などは「藤村先生はわれわれ部落の者の為に信州の山に七年も立て籠って破戒を書いて下さった」（私にこんな事を言った水平社の古い闘士であった古老がいた）などと思っている人達を多分はがっかりさせそうであるが、言ふまでもなく慟哭の心はそれきりでは決して部落問題解決の方には動き出さないものであり、この事は後に触れるつもりであるから「憐れむといふ心で」「破戒」を見る読者からも部落解放思想は期待出来ないものであることをここに一言するにとどめる。更に附言すれば、藤村の差別観念の程度など「破戒」の中を探し求めるよりこの「山国の新平民」を一読する方が手取り早い訳のものであるが、こんな文章が堂々と発表されるという、著者をも含めた明治三十九年の日本の社会を考えてみる必要もありそうである。

藤村をしてこの様な社会小説を書かしめた動機としては、猪野謙二の「この社会性というもうひとつの契機が、これに先立つ明治三十年代のいわゆる社会小説、ないしは社会主義小説の延長線上にあったということも注目さるべきで、その意味では内田魯庵の『くれの廿八日』や木下尚江の『良人の自白』を私はあげておきたい」（島崎藤村・昭和・三八・八・有信堂）という発言は注意されるべきだと思う。時代の動きに鈍感でなかった藤村のことを思えば尚更のことである。

で、「破戒」は「千曲河畔の物語」の集大成、つまり「緑葉集」の短編の如き、客観小説として今度はより一層幅広く、且つ深刻にして、新奇な社会問題、人権問題を含む、部落民を主人公とした「社会小説」として書かれたのである。勿論従来指摘されて来た如く、「破戒」に先立って部落民をとりあげた小説には、小栗風葉の「寝白粉」（二九）黒法師の「想夫憐」（三六）大倉桃郎の「琵琶歌」（三八）などがあるが何れも所謂家庭小説の域を出ないものであったに反して、「破戒」は近代文学としての高度のリアリティをかち得ている、つまり芸術的にすぐれているという事によって夫等とは区別されているのである。

「破戒」を客観小説、社会小説として見る場合、その文章や自然描写の卓抜しているのにひきかえ、人物描写や社会批判の精神に見劣りがするというのが従来の定説になっている。当時の批評の中で、例えば正宗白鳥のを次に引用してみると、

——七百頁の大冊、外界の波瀾は平々凡々筋は極めて単純にて、数行にて語り尽さるる程なるが、内部は人知れず死に勝るの苦痛を経過す。而して作者が斯る単純なる事件を長々と叙しながら、少しもくどく感ぜしめざるは功なりといふべし。只吾人は主人公に対する外部の圧迫の甚だ弱きを覚え、少し歯痒し。丑松を穢多と知りても、銀之助は彼に対する態度に変りなく、学生も其他多数の人も皆丑松に同情する為、彼の悲惨が虚偽のやうになりたり。信州地方の

叙景は清新の筆にて細く写され、この点に於いて作者の技倆他の及ばざる所なるべし。丑松以外の人柄にては、敬之進最も活動、丑松と性行境遇の対照をなすも面白し。猪子蓮太郎は主人公の尊敬する割合には人格高からず。お志保は可憐な処女なれども、茫漠として読者に多くの印象を与へず。丑松との恋も描き到らざる趣きあり。銀之助は重要なる人物にて、屢々現われ来れども、筋の為に利用されし人の如く、充分に個性を具えず、全篇を通じて叙景も人物の描写も穏和平静にして強く人に迫る所なきは、この作者の特色なるべく其の新体詩に於けると同じ。（読売新聞・明治三九四二九）

大体のところは、この白鳥評は受け入れてよいと思われる。人物描写云々というのは言葉をかえて言うならば、人物が類型的にしか描かれていないと言う事になろうか。郡視学、校長、文平、高柳、町会議員達の様な悪玉と蓮太郎、銀之助、敬之進、お志保等の善玉が生々と動く様には描かれていない。「破戒」の様な社会問題をふくむ様な作品に主人公に対する、敵役が生々しく描かれないと、主題を効果的に印象づけてくれないものである。丑松の苦悩がひどく個人の主情的なものになって、この場合は部落問題なるものが切実を欠いて来る事になる。

然しこの小説が近代文学の記念碑的作品になり得たのは、前言した如く、高い芸術性を持っているからだという。そしてその中心は主人公丑松の内面的苦悩の描写にあるのだという事が定説になっている。私もこの説に異論はない。事実、この「破戒」を読み進んで行って感じられる小説的感動は丑松の苦悩の高まりに歩調を同じくしている。丑松が自分の身元を告白しようとする方向にむかいはじめるのは蓮太郎に関連してであって、第十四章・四のところで「先生、許して下さい」と心で詫びる頃からであろう。十九章・六で「自分は一体何処へ行く積りなんだろう」と自分で自分に尋ねながら、絶望と恐怖とに手を引かれて雪道を彷徨するところは編中の白眉ではあるまいか。屋根の雪の落ちる音にも驚ろき、四・五人集って話している人達も自分の事を言うのかと怪しまれ、丑松は千曲川の畔に出る。そこには冬期の生活の苦痛を感ぜさせるやうな光景ばかり、河の水は暗緑の色に濁って、嘲りつぶやいて、溺れて死ねと言はぬばかりの勢を示し乍ら、矢のやうに早く流れていた。「何故、自分は学問して、正しいことを慕ふやうな、そんな思想を持ったのだらう。野山を駆け歩く獣の仲間でもあったなら、一生何の苦痛も知らずに過されたらうものを」という覚めたる者の悲しみをのべるのもここである。放逐か、死か、というところで丑松は既に死を思っているのである。二十章の冒頭

――せめてあの先輩だけに自分のことを話さう、と不図、丑松が思ひ着いたのは、其橋の上である。「噫、それが最後の別離だ」

最後の別離というのは、死ぬ積りだからである。

――月は空にあった。今迄黄ばんだ洋燈の光の内に居て、急に斯う屋の外へ飛出して見ると、何となく勝手の違ったやうな心地がする。薄く弱い月の光は家々の屋根を伝って、往来の雪の上に落ちて居た。軒廂の影も地にあった。夜の靄は煙のやうに町々を籠めて、すべて遠く奥深く物寂しく見えたのである。青白い闇――といふことが言へるものなら、其は斯ういふ月夜の光景であらう。言ふに言

はれぬ恐怖は丑松の胸に這ひ上って来た。

丑松の恐怖を象徴するかの如く「青白い闇」と述べたのは絶唱である。丑松の気持とこの情景描写が寸分のすきもなく、象徴的の域にまで達している。文芸の力と魅力が感ぜられるのはこの様なところである。小説の筋としてはこのあとで蓮太郎の横死に会い、丑松は慟哭する。そして題名の「破戒」を実行しようという言葉が述べられる。

――其時に成って、始めて丑松も気がついたのである。自分は其を隠蔽さう〳〵として、持って生れた自然の性質を銷磨して居たのだ。其為に一時も自分を忘れることが出来なかったのだ。思へば今迄の生涯は虚偽の生涯であった。自分で自分を欺いて居た。あゝ――何を思ひ、何を煩ふ。「我は穢多なり」と男らしく社会に告白するが好いではないか。斯う蓮太郎の死が丑松に教へたのである。急に丑松は新しい勇気を摑む「いよ〳〵明日は、学校へ行って告白けよう」と。藤村は嘗て「吾胸の底のこゝには、言ひがたき秘密住めり」（落梅集）と歌った。そして明治三十七年九月、懸命に「破戒」の草稿の筆をとりつつあった時、その「藤村詩集」の序に「げに、わが歌ぞおぞき苦闘の告白なる。なげきと、わづらひとは、わが歌に残りぬ。思へば、言ふぞよき。ためらはずして言ふぞよき。いさゝかなる活動に励まされてわれも身も心とを救ひしなり」と書きつけたのである。

丑松の内面的苦悩の表現に、作者藤村の投影があるという事には何人も異論がないであろう。蓮太郎の死について心なき世間の者がとやかくの噂をする個処は、北村透谷の場合の藤村の感懐とぴったり一致すると三好行雄が「『破戒』論への試み」（昭・三七）の中で述べている。丑松の父への慕情の中に、藤村の父正樹への気持がにじんでいるというところもある。丑松が幼き日を回顧するところに、詩「初恋」のモデルがおそらくはそのまゝ使われている。そんなことをいえば、丑松を描きながらの詠嘆調の中に「若采集」以来の詩人藤村がいきづいている。兎も角、作中の人物に作者自身の投影があるという事は、近代文学に於ては珍らしい事ではない。だからと言って、――ここで私は大いに開き直って強調したいのだが――「破戒」が自己告白文学であると解するのは間違いである。

三、社会小説か、自己告白小説か

従来、「破戒」の評価という面で二つの対立した意見がある。一つは自己告白小説としてみる見方で、吉田精一（藤村研究史通観）によれば佐藤春夫（近代日本文学の展望）和田謹吾（「破戒」の史的位置）野村喬、越智治雄がそれであり、他の一つは本格小説もしくは社会小説とみる方で、それには平野謙（破戒論）瀬沼茂樹（島崎藤村）片岡良一（自然主義研究）中村光夫（風俗小説論）及びプロレタリヤ文学の論客たち、があり、吉田氏自身は前者に重点を置く態度をとっている。尚この二つの評価軸の再検討については三好行雄の（「破戒」論への試み）が最も詳細で立派で、「社会小説か自己告白かといふ設問自体が無意味なのであって、真に必要なのは、『破戒』を現に書かれてある全体として評価するあたらしい基軸の発見である。つまり、

部落民の条件を必須とする瀬川丑松の意味を、小説の内的構造に即して統一的に捉えなおす試みが要求されるのである」との主張は傾聴に価する。そして「社会小説か自己告白かという従来の視点でいえば、わたしもまた、後者のがわにたつ」との線にそって、「破戒」には「告白による自己救抜のモチーフの完成」があるとして、二つの評価を止揚した第三の視点を提出した。

平野謙が指摘した通り客観小説、本格小説とみる方からは日本における近代小説らしい骨骼は「破戒」から「春」への屈折のうちに流産したとみる見方につながるし、自己告白小説とみる方からは「破戒」から「春」への道は藤村自身にとって必至のコースだとみる見方がむすびつく。中村光夫は本格小説「破戒」が田山花袋の「蒲団」に影響されて自己告白小説「春」へと屈折した（正宗白鳥も同じ見解を発表した）との仮説を出したが、この仮説自体は「破戒」執筆中に「春」のテーマが出来たと言う藤村の言葉を重視する人達や、前掲の佐藤春夫以下、破戒告白文学説の人々からは当然反対されているが。右の二つの評価軸からは「春」「家」「新生」とつづく自伝作家としての藤村文学とか、藤村、花袋をもって始まる日本自然主義文学の歴史からの、主に史的位置づけという点で対立や困難を招くのである。

私はここで、前述の通り「破戒」の人物描写が多く類型的で物足りないと述べたそのあとを受けて、主人公丑松、及び部落に関する描写を見てゆきたいと思う。登場人物のイメージとして、丑松の人間像は鮮明に描けているかどうか。他の人物に比し、可成りな程度にそれが描けている様に私には思える。恐怖（おそれ）と哀憐（あはれん）にふるえる丑松像は相当な説得力で我々に迫る。私は中学生の頃「破戒」を読んで、藤村は部落の出身かと思ったことがある。とんだ笑話ではあるが、部落民としての肉付けが可成りの程度に出来ている事は事実である。「山国の新平民」で藤村が述べた実態調査の結果が「破戒」の中に組み込まれて効果を挙げている。部落に関する記述もそんなにお粗末ではない。「破戒」は良く調べて書かれている。丑松像の持つ説得力の要素として、恐怖や哀憐を、そして彼の苦しみを我々は挙げるべきであろうが、一個の素直な読者として、その内容をどうとるべきであろうか。勿論のことである。この恐怖は彼が部落出の者だと世間に知られる事を恐れる心であり、哀憐とは、自分が穢多に生れたことを自らあはれむ心であり、苦しみは穢多であると自覚したところから生れて来るものである。読者は前述の神津夫人の叔母が、「破戒」を読んでからは、もう穢多のことは悪く言うまい、と言ったと同質の感動を受けとるのである。私は自己告白文学説側の意見に対し、「破戒」の中での丑松の告白とは何かを問いたいと思う。丑松の告白とは「我は穢多なり」という一語である。丑松の父が己の全生命をたくして息子に課した「戒」もこの一語である。白鳥も述べている、

——主人公の穢多が其の素姓を何時迄も隠さんか、打明けんかと煩悶する心的状態を精細に叙述したる者にて、世人未だ迫害せざるに先だって自分自ら隠蔽の苦痛に堪へざる心事を描きたるが趣向なるべし。

「心的状態」の「精細」なる叙述が「破戒」内容の中心であり、小説の成否も大きくそこにかかっている。然し丑松の苦悩に満ちた「心

的状態の描写」がそのまゝ告白なのではない。「我は穢多なり」と告白するまでに至る苦痛に堪えざる、丑松の心理描写が「破戒」の趣向、テーマであったと言う事で、

――藤村はいかにも巧妙に丑松に扮装した。しかし小説化以前の彼の主題――詩人が習俗に反抗して真実を思ひ切って歌はうとした頃の作者自身の心情の歴史を丑松を通じて云はうとする作意（生のままの主題）は争ふべくもなくところどころにその片鱗を現はしてゐる。……作者藤村が「破戒」の作意は丑松の身の上ではなく自分の感情解放に関する苦闘の物語であると我々に囁くのを聞くやうな気がするのである。……藤村は破戒を以てすぐ社会問題を直接に取扱はうとしたのではなく、実は心境小説とも身辺小説とも云ふべきものを大がかりに書いてゐるといふのが自分の言ひ分なのである。（藤村の「破戒」について）と云う佐藤春夫の言葉には賛成出来ない。

「我は穢多なり」と告白するまでの苦悶の心理過程を「詩人が習俗に反抗して真実を思ひ切って歌はうとした頃の作者自身の心情の歴史」とはとても受けとれもせず、材を奇抜な部落民に求めてそこに甘いながらヒューマニティーを塗り籠めて仕上げた丑松の物語を大がかりな「心境小説」とも「身辺小説」ともとれよう筈がない。馬鹿げた言い方ながら、作中人物に対する作者の自己投影と作者自身の告白とは同義語ではない。丑松の苦悶や詠嘆に「若菜集」以来の詩人藤村の息吹きが感じられるという。当然の事ではないか。亀井勝一郎によれば（「島崎藤村論」昭和二八・新潮社）詩人藤村は「落梅集」で詩人を捨てたのでなく、以後「破戒」より「夜明け前」までその詩人的性情が色濃く作品ににじんでいるという事であるが、その一面も認めていい事柄であろう。告白文学とは藤村にあっては「新生」の様な作品をいうのである。或は又「それと打明けては自己の精神も破壊されるかと思はれるやうなもの、さういふものをも開いて出して見ようと」の意気込みで書かれた、田山花袋の「蒲団」の様な作品を言うのである。

佐藤春夫の発言には、「破戒」に取りあげられた部落差別の社会問題を過少に見過ぎる芸術派らしい偏見が見られる、と私には邪推される。「緑葉集」の諸作は愛慾・姦通・不倫のテーマに溢れて居り、このモチーフには「家」で描かれた様な作者藤村の妻冬子に対する嫉妬があることは周知の通りであるが、「破戒」の丑松には「春」で描かれた様な鬱屈した。青春の悶情とその感情開放の要求がひそかに塗り籠められている。「緑葉集」の諸短編が客観小説である如く「破戒」も又本格小説である。これが私の解釈である。

「千曲河畔の物語」の集大成として「破戒」は書かれた。明治三十年代の社会小説の風潮にも動かされて身辺に起った差別事件に心を動かし、部落民の物語を彼はとりあげた。実態調査の結果を懸命にとり入れながら、彼は西洋の本格小説の手法でそれを書き上げた。丑松の心理描写に彼は若き日の「おぞき苦闘の告白」を塗り籠めた。或はそれをぬり込めた事によって近代文学作品となり得た、そのリアリティーを獲得し得た。これが「破戒」である。「春」は「破戒」執筆中に丑松に投影させた自分の青春の自画像を明確化せんとの要求と、その

自信がみちびいた自然の成り行きである。手法は正しく違う。即ち、西洋に学んだ本格的リアリズムの方法と、その方法に加味された藤村独自の工夫による自伝小説の方法と。之は小説作法の変化である。この意味で屈折という従来の説明は私には納得出来る。尚、和田謹吾は「島崎藤村」（昭和・四一・三・明治書院）や「自然主義文学」（昭和・四一・一・至文堂）で、「春」の初め三分ノ二、九十四章で青木が死んだところで一段落があり、あとの岸本と勝子の物語の部分は「蒲団」の影響によって、自己告白的方法が強調されている事を述べている。

和田謹吾は「破戒」の自己告白性に重点を置く側なので、この場合も「〃破戒〃で摑んでいた自己告白的方法がそこで一旦屈折しかけながら、〃蒲団〃の影響によって再びより直接的な形で原型に挿入され、それが「家」に到って藤村の方法として確立されたので、〃春〃の構造は〃破戒〃から〃家〃に到る方法上のジグザグ運動を示すものではないかと考えるものである」（自然主義文学・頁一四三）という風に述べているが、それでは「春」の最初の三分ノ二までの部分の、藤村の方法というのはどう呼べばいいのであろう。同氏の研究に従えば「春」の構成は、メレヂコフスキーの「先駆者」に負うものがあるという事で、「春」では透谷という先駆者を描くという事が原型であったと推断されているが、その原型の小説作法上の方法、態度とは、「破戒」からひき継がれない、西洋小説の方法とでも言うのであろうか。無理がある、と私には思える。「破戒」自体が西洋小説、リアリズムの本格小説の手法・態度に立つものであり、その主人公丑松に藤村が青春時代の自己を可成り色濃く投影した。且つその事が彼に〃春〃の構想を思いつかせた。和田氏の指摘する前半は材を自身の青年時代にとり、主人公を透谷に求めている。本格小説製作の態度である。後半になって、「蒲団」によりその自己告白的な花袋の態度に影響された。

――其日、別れ際に、岸本は自分の持って居た帛子を勝子にやって、勝子が持って居たのを自分の方へ貰った。勝子のは、すこし汚れてクシャ〳〵に成って居たので、そんな物を取換すのは可羞しくも有り失礼でも有ると思った様子であったが、岸本の方で無理に貰ひ受けた。それが岸本の袂にある。彼はその鼻洟をかんだり涙を拭いたりしたやうな帛子を大事さうに取出して、それを自分の顔に押当た。而して、可懐しい人の肌膚を嗅ぐやうな思をした。（七十二章）

の様な文章をその証左と考えていいのではないか。

「春」でこころみられた西洋式本格小説、プラス花袋式自己告白小説の手法は、藤村独自の自伝文学の手法として「家」に於て完成したのである。

四、部落問題

「破戒」に書かれた差別事実については発表当時にこの迫害の過度にすぎると難じたものが多い様で、吉田精一（自然主義の研究）によれば、大部分は「穢多に対する嫌悪の情は東京に住む者には不思議だ」

（大塚楠緒子）「小説としては十分身にしみず、結構が納得できぬ。新平民と平民の闘争があまりはげしすぎる。自分の諸地方での観察ではこんなではない」（柳田国男）「自分の本国を標準として観察するに、穢多に対する嫌悪はこれほどでない」（近松秋江―以上「早稲田文学」）「信州北部の新平民に対する作者の感慨が他地方の人々をして余り多くの同情を払はしめない」（武田桜桃「新小説」）などの類らしい。更に、当時比較的多くの時評を収集して概括した「新潮」（三九年五月）が、通説が欠点とみとめた第一として「穢多種族の迫害を寧ろ誇張に為過ぎた嫌あること」をあげたのはこの為であり、藤村が「山国の新平民」で、八年間信州にいた見聞にもとづいて書いたと強調したのは以上の非難に応へたものであった。と述べておられる。

吉田氏は、では当時の部落差別の現状はどうであったかという考察の方へは筆を進めないで「しかし、たとひそれが現在の事実を拡大誇張したものであったにせよ、効果としてレアリテを感じさせるものであったならば、欠点としてとがめることはできないであらう」という風に論点を転じている。そして、漱石が「一編のモチーフが少々弱いかと思ふ」（森田草平あて書簡、三九年四月一日）と述べたその意味をさぐり、「『罪と罰』の主人公がみづから犯した罪に悩み苦しむのに反して、丑松は偶然生れ合はせた民族的立場、たゞそれだけのことであの煩悶を続ける、その動機の弱さ」を最大の弱点だとした里見淳の意見に近いものと推察され、その点については「自己を隠蔽する苦痛、父の戒めに背く苦しみだけに限るならば、或は丑松の苦悶は大げさにすぎるとしても、いひがたき秘事の曝露によって、生活の根底を失ひ、永久に社会から葬られる危険をおそれる気持としては、許容されないことはあるまい」と述べておられる。

部落の解放は、明治初年から盛り上った、先進的下級武士の立場からの要求に明治政府が動かされて、明治四年八月二八日、大政官布告六一号をもって、所謂「解放令」を発布したに始まる事は周知の通りである。この当時の穢多身分の人口は約四〇―五〇万（全人口約三、五〇〇万）であったといわれるが、明治の「解放令」の本質が形式的、制度上の安易な「解放」に過ぎず、その農業政策にみられる様な、その財政収入源の、地租の源泉である地主所有権、および小作料収得権を保護しなければならない様の悪しき封建性を色濃く残存し、貧農は、明治御一新を迎えても少しも生活が楽にならなかった実相は「夜明け前」に書かれた、山林にたよる街道沿いの農民達の姿、と同様であったのである。「部落の歴史と解放運動」（部落問題研究所・昭和二九・八）には、

――このように日本全体の農業革命を果しえなかった明治政府が、部落民に土地を与えたり、その生業資金を貸与したりすることは到底なしえないところである。ここに明治政府の「解放令」が名称の廃止だけに終らざるをえなかった根本的な理由があるのである。かくて部落問題は本質的に日本の農村問題と関連していることを知るのである。

と書かれている。封建性を色濃く残存させ、「解放」の実を挙げ得なかった明治の社会に差別事実の存在する事は当然で、三好伊平次の手記「七十年の回顧」、松本治一郎「部落解放への三十年」（昭和二三

・九・近代思想社）にその実情の一端が明記されている。

前述の、部落迫害が過度であるとか、表現が誇張に為過ぎたとかの評言は当っていない。それは部落に対する知識や観察や見解の浅い、文壇人達の主観的な妄断である。藤村の描写は、現実に基礎を置いた正しいものである事を認めなければならない。

次に「罪と罰」の主人公にくらべて、丑松のは「偶然生れ合わせた」穢多という身分だけのことで煩悶を続けるのは動機として弱いと述べた里見淳の意見についてであるが、殺人を犯した事についての罪の意識の問題と、穢多に生れたことによる苦悶とは、勿論別種の問題で、苦悩の程度を比較することに大きな意味があるとは思えない。この点にこそ、吉田氏の「文芸上のレアリテ」を云々すべきではないだろうか。即ち、丑松の苦悶がどの程度に迫真的に描かれたか、である。吉田氏は「丑松の苦悶は大げさにすぎるとしても」「生活の根底を失ひ、永久に社会から葬られる危険をおそれる気持としては」ゆるされると述べているが、それは「新生」などを踏まえての理解ある見解とは思ふのであるが、丑松の苦しみに、部落の子としての苦しみが描かれているか、という事がより大きな問題になるのではないか。

結論的に言って、藤村は丑松に於ては、青春時の自己投影によって或る種の苦しむ青年の姿は可成りの程度に於て造型し得たが、苦しむ部落の青年の姿は迫真的に描写出来なかった。部落問題に限り丑松の苦悩には、差別する人間達に対する怒りがない。人間あつかいされない事に対する怒りや憎悪が弱い。又知識人であるくせに、猪子の著書を読むだけで、つまり情緒的に同身分の先輩の言に慰めを求める丈で、いわれなき差別に対する知的研究がないのも不思議である。この場合、佐野経彦「餌登利考」（明治十六）、小中村義象「賤民考」（明治二十五）柳瀬勁介「社会外の社会穢多非人」（明治三十四）などが参考にされていい著書の様に思われる。差別する事の不当なる事、そのいわれなきことの主張と、丑松の心情に裏打ちされた人間心理が描かれねばならないのではないか。

殺人を犯したラスコーリニコフの苦悩以上に、部落に生れた丑松の苦悶が描けるか描けないかは、作家藤村の手腕にかかっている。題材の問題ではない。藤村の、部落に対する理解や、認識の浅さがその一大原因であると筆者は考える。藤村自身がこの時代に残存した差別観に深く囚われていた事がその根本原因ではなかったか。今この点に立って「破戒」を詳細に再検討する余裕はないが、丑松も猪子さえもが部落生れのものはいやしいものだとの考えを肯定している。作中最も戦斗的な猪子蓮太郎の最後のたたかいも、自己の支持する候補の対立者高柳の妻が同じ部落民であることを曝露するという大して意味のないたたかいに終っている。猪子のモデルとして中江兆民など恰好のものと思われるが、あの「新民世界」を説いた民主主義思想家の面影は全くない。

前掲の柳瀬の「社会外の社会」はそれ以前の人種的起源説に対してはっきりと之を否定したのが特徴で

——えたと称せられたるもの元と吾人と同胞の民、彼等を平民籍に偏入したる素より当さに然るべきのみ。決して人外のものを人類に進めたるにあらず。又天然の無能力者に吾人と同等の地位を得しめ

たるにもあらず。唯々往古仏教迷信の時代に於て彼等を人外視したる陋習を打破せられたるのみ。

と記している。柳瀬の部落救済策は、一は部落民自体の道徳智識品格を高むる事と、一は社会の擯斥の習慣を去る事とに要約される。後者に対する具体的方法としては住居の移転、海外移住とくに「戦勝の結果として」手に入った台湾への移住をすゝめている。「この柳瀬の救済策すなわち部落解放論は部落民の教化と海外移住とを説く点で誠に特徴的である。すなわち部落民を依然として「穢多」身分に押し込めている日本社会の民主化の徹底を図ることなくして、社会に対する部落民の適応を教え、また日本の帝国主義的海外発展の線に沿った海外移住を説く点は、先進の杉浦重剛の所論にも通じているわけで、杉浦は「樊噲夢物語」（明治・十九）で南洋諸島への侵略をけしかけており、「関門新報」の南部露庵は「韓国」「満州」「南洋蛮地」遠征を説いた。

「破戒」の丑松がその結末でアメリカのテキサス州へ渡るというのはこの柳瀬の論を採り入れたものと思われる。これは然し、自明の如く、明治以来の、国内問題の解決を対外進出に求めようとする悪い伝統をそのまま受継いだものではあるが。この点、南部の遠征論を採り入れたものが大倉桃郎の「琵琶歌」であって主人公荒井三蔵が「胸に金鵄勲章を閃かし」と夢想し実現するのがそれであろう。

「破戒」で最も弱点として批難されるのは今触れた結末の部分である。尤も発表当時は同じく欠陥とするのでもその理由は逆で、島村抱月は、この結末を色彩あざやかに「さながら暗夜の果から新日の次第に昇り行くが如く描いてもらひたかった」（早稲田文学・三九年・五月）という風なものであった。現代はその逆で、平野謙も瀬沼茂樹も、この結末を小説的解決、架空的なすがたと呼び、猪野謙二が「この暗い日本の社会において、自らをも含む不幸な虐げられた階級すべての解放のために戦い通すことなどではなく、むしろそのたたかいの場をのがれて、愛人のお志保に寄りそわれつつ、遠くテキサスへ旅立つという、あまりにも小説的なロマンチックな結末に終っている」と述べた意見に代表されるやうである。

吉田精一は「テキサス行きは部落民の運命をレアリスチックに救済する現実的地盤が発見されなかったための止むなき解決策であった」として、柳瀬の著作に触れ、この結末は「架空」ではなくレアリテをもっていたと述べ、「現実としても部落民が集団とし戦ひ得る地盤を得たのは、大正十一年三月の水平社結成以後で、これによって見ればテキサス行きをロマンチスム的解決として責めるよりも、部落解放運動の闘士（瀬沼茂樹）たることを望むことこそ、むしろロマンチックな希望であるといはざるを得ない、「破戒」の結末を難じたどの批評家よりも、作者藤村はむしろレアリストとしての正確な眼をもっていたといふべきではあるまいか」と結論しておられる。一つの卓見として耳傾けるべきものがある。部落民が自覚して起ち上ったのは水平社の運動以後の事であるから、架空でないモデルを求めるとすれば、猪子のモデルは、「東雲新聞」に「新民世界」と題して――

余は社会の最下層に居る種族にして、今日公等の穢多と呼び做したる人物なり。（明治二二）

と叫んだ中江兆民しかない様である。南洋諸島遠征、台湾移住も、之等論者の提出した方策という事であって、現実として当時、政府が一つの施政として実行していた訳でも、部落の者が移民する風潮があった訳でもない。

丑松をして、中江兆民のあとを襲わしめるのが可か、民間で刊行された之等論者の説を採り入れてテキサス行きにするのが小説の結構として、よりすぐれているか。要は平凡なことながら、小説の作品としてのレアリテの問題である。確かに藤村は安易に、柳瀬の説をとり入れた、柳瀬の説自体、今日の眼より見れば本質的に正しい方向にまで、こぎつき得なかった解放理論、解放方策であった。甚だ「架空的」で、「ロマンチック」である。まぎらわしい言い方になったが、小説の真実性の上から言えば、筆者は猪野説に賛成で、テキサス行きは甘いと思う。ただ然し、その甘さは前述の如く柳瀬説の採り入れ方にあるのであって、この点「破戒」は「琵琶歌」より甚だしく高級であるという訳にはゆかぬと思う。結末のテキサス行きが問題であるなら、その手前に書かれた、告白場面の描写がより大きな問題であるだろう。

生徒や同僚の前に跪いて、「恥の額を板敷の塵埃の中に埋めて居た」というのが昭和十四年の改訂版では「同僚の前に頭を垂れ、両手を堅く組み合せて、一生の決意を示して居た」となっているが、生徒の前では「丑松はまだ詫び足りないと思ったか、二三歩退却して、『許して下さい』を言ひ乍ら板敷の上へ跪いた」（初版）とある。ここも改訂版では、単に「丑松はまだ詫び足りないといふ風であった」となっているが、丑松は生徒に何を詫びようというのであるか。詫びるべき何があるというのだろう。彼は先輩の死体を前にして、急に「新しい勇気」をつかんだというが、その面影がどこにあるか。猪野謙二が書いた様に「あまりにも卑屈なその告白の場面を、こんにちの果して何人が首肯しえよう」と筆者も述べざるを得ない。「破戒」の恐らく最大の失敗個処はここである。

差別観念の激しい環境と、描かれた限りの怯懦な丑松の性格とをからみ合わせてもこの丑松の行動態度は不自然である、そこに芸術上の真実性は無いと筆者は思う。作者藤村の描くイメージには、芸術上の必然性は無く、囚われた差別観念に由来する、俗っぽい現実解釈がそこにある。

五、部落内部よりの評価

「破戒」が部落の人達に、どう読まれて来たかという問題は仲々関心の寄せられる問題であり、或意味では非常に重要な事柄であるに相違はないが本稿ではその詳細に及ぶ余裕がない。管見に入った限りでは、作者藤村に差別観念があり、部落解放の運動の上に有害な働らきをして来た、というのが大方の一致した意見の様で、その代表的意見は、「藤村全集・第二巻」（昭和・四十一・十二・筑摩書房刊）の巻末に載せられた「『破戒』初版本復原に関する声明」と題する、部落解放全国委員会の声明であろう。

「破戒」が書かれて十数年後の大正十一年、部落の中から部落解放

運動の結社が組織された。これが水平社であり、この全国水平社の方針が強く影響して、昭和四年、新潮社が「破戒」初版本を絶版にしたのであった。

昭和十四年（「破戒」が書かれて約三十年後）に新潮社刊「定本版藤村文庫」第十篇にこの「破戒」が「たゞところ〳〵字句を改めたり省いたり」という程度の改訂をほどこされて、「身を起すまで」という別名を付し、再刊「破戒」の序、及び「『破戒』の後に」という著者の、あとがきを添えて編集出版されている。

水平社の後身、現在の部落解放全国委員会の意見によれば、この改訂は「穢多」という称呼をただ「新平民」と呼びかえただけの事で、作品に厳として内在する「差別観念」の抹殺にはならなかった、全国水平社が当時、このような妥協を行ったことは重大な誤謬である、というのである。「破戒」を改訂して、解放委員会の期待する様な「差別」を抹殺する事が可能なものかどうか疑問であるが、右委員会の「破戒」に対する決定的な評価は重要視されねばならないだろう。委員会はその声明文中に「日本文学史上における『破戒』の歴史的意義にもかかわらず、藤村の被圧迫部落民に対する差別観の故に、『破戒』が差別小説の域を決して脱していない」と述べている。

又、昭和四十二年四月刊行の、小説「吹雪を衝く」第一部（著者・あずま・よしんど・人生堂書店刊）の中に小説中の人物の意見として、その「破戒」評が述べられているが、その二、三を要約すれば次の如くである。その一つは、小説の結末に近く、丑松が教え子達の前で告白にうつる前の「皆さんも御存知でしょう」にはじまる長い言葉は、あの時丑松は、手も足も慄えたと書いてあるが「それが自分の身分を打ち明けることの恐ろしさからか、それとも、腹から済まないと思ったためなのか」はわからないが、「人間として、怒りのために」読んだ本人が本当に身体が震えたと述べている。

又、丑松や猪子の様な当時のインテリが、自分達を「卑しいとされていた人間」とは思っても自らを「卑しい人間」だなどと思い込む筈もないのに「破戒」にはそのように描写されている。又、名前のつけ方でも、「金色夜叉」の間貫一や富山唯継などと同じく、利に走る相手が高柳利三郎、丑松の親友が銀之助、愛人が志保、という具合であるのに丑松と猪子は感心出来ない。

息子に「かくせ」と「戒」めた親父が「ウシ」と子供を呼ぶ、そんな名前をつけるだろうか、小説の中で「四足」などの文字が処々に出て来るので、作者藤村自身「あの頃、差別の心の強かった人達と少しも変わりのないものだと思」われて不愉快であると述べている。

名前の付け方云々は多少神経質にすぎる様であるが、同著者が、他のところで、「藤村は、差別するのを、何かやむを得ないことのように解釈して、それで、それをしなかった銀之助や志保を、特に美しいものとして書いているのかも知れない」と発言しているのは、注目に価する。丑松の環境がどうにもならぬ運命的のものであり、むしろその事が放逐の恐怖に胚胎する丑松の宿命感にリアリティを与えているとして、丑松の新生が、アメリカ行きでなく蓮太郎を継ぐ社会とのたたかいのなかで可能だと信じたらおそらく「破戒」は構想されなかったはずだとは、三好行雄の断定である。

三好のこの断定は「破戒」を自己告白を本質とする側の評価にひきつがれていっているので筆者は賛成出来ないが、藤村が、丑松のこの環境を、どうにもならぬ宿命的のものとして扱っているという事は、明白であろう。従って、テキサス行きの様な、当時の世相の実情から考えて、それこそ家庭小説的結末を安易に構成した様な藤村の心には、「ただ封建制度崩壊のあとにも、なお存続した身分差別というものの悪と、祿を失った下級士族の憐れさ惨めさなどを書くことに止どめて、別に社会に、部落問題解決の糸口を与えようとも考えなかったし、――たとえそれは無理にしても、とにかく、部落民に希望を持たせようなどとの意見も、全く持たなかったものに違いない」という、「あずま・よしんど」の意見も認められていいものと思われる。

「部落の歴史と解放運動」の一節に「藤村の興味は『穢多の子』という秘密をもった一青年が、その秘密を守るべきか明すべきかに悩むというところにあって、彼が差別に対していかにたたかうかという点にあるのではない。従って「破戒」の意義は当時社会問題となりつつあった身分的差別の事実を、広く国民大衆の前に強く描き出して見せた点にあるというべきである」と述べられているが、「破戒」はその様な小説なのである。そして「差別される事の言語に絶する苦悩を知る事の少ない多くの文学史家や文学評論家が藤村のヒューマニティーを如何に高く評価」しようとも、部落の人達が藤村の「破戒」の根底にある封建的差別観を鋭く見抜いて抗議しつづけて来た事は事実であり、解放委員会では、藤村の「破戒」は彼の差別観に貫かれた「その差別性の故に国民感情をいたずらに刺戟し、部落民に対する差別を、更に拡大することに重大な役割を果した」と断定し、「藤村が『破戒』を通じて訴えようとした意図は、彼の差別観の故に決定的に弱く、その芸術的真実の弱さの故に、かえって部落民を国民と対立させずにおかなかった」（傍点筆者）と述べた。

「意図」というのがヒューマニズムの指向する解放を意味し、「芸術的真実」というのは、苦悩する部落のインテリ青年丑松の人間像の芸術的造型の事であるだろう。「たとえ『破戒』によって歩もうとした方向が、正しい道をはるかにさし示していたとしても、そのヒューマニズムはより低いものであり、より弱いものであったといわねばならない。

藤村が封建制と対立することを避け、日本の近代文学をうちたてる可能性を、わずかにさし示しただけで、その門から惨めに遠去かり、敗れ去ったのは、故のないことではない」というのが同委員の断定であるが「破戒」は勿論、「破戒」を離れて藤村の文学全体に及ぼされたこの評言には傾聴に価するものがあるのではないか。藤村の作品系列はこのあと「家」「新生」から「夜明け前」に到る訳であるが、「夜明け前」では何が、どう書かれたか。あの中では青山半蔵が描かれ、街道に沿う、庶民達が描かれた。

青山半蔵に関してはそれこそ汗牛充棟の論がなされている。「夜明け前」の庶民に対する描写態度がもっと論議されるべきではないか。その時、長篇の最初と最後の、自己告白でないこの二つの小説が比較されて論じられる事があっていいと筆者は考える。

六、初版本復刊の今日的意義

「部落解放」創刊号（昭和二一）の「破戒上映について」に於て、部落解放の父と呼ばれる、松本治一郎は「破戒」に対して厳しい批判を行った。

「破戒」上映の理由が、そのヒューマニティーにあると聞かされて驚ろき「私は今日、日本の人民がうち建てようとしている民主主義は小説「破戒」を縫いとっているあの浅薄な人道主義の否定の上に立つものだと確信しているからだ」と述べ、「あの藤村の、あの人間的なものこそ逆に、今日の非人間的なものの一切を産み出しているものだと信ずる」と断言している。

松本によれば、どのような人道的昂奮が若い藤村を駆り立てたとしても決定的な差別観念に立った彼には部落民の苦悩が理解出来る筈がなく、テーマの成熟にともなって彼の胸に具象化され描きあげられてゆく主人公丑松に部落民の生々しい苦しみが少しも描かれなかったのも当然だとし、「日本の文学史は、そのような知識人の苦しみに表現を与えたことに、自然主義の先駆を見、価値づけているようですが、部落民であるという、その肉体の描けなかった、そしてむしろ、差別観のゆえにその肉体を描こうとさえもしなかった、レアリテートをもたない作品にはたしてそれだけの芸術的価値があるのかどうか、私にはわかりません」と手きびしい事を述べている。

丑松の「部落民の肉体」が描かれなかったという意見は重大であるが、それは他の人物描写に対する同様の意見と共に省略して、筆者は次の言葉に注目したいと思う。

――小説「破戒」をそのまま再現した映画「破戒」から日本の人民は一体なにを汲みとりうるでしょうか。丑松の悲劇に安直な同情の涙を流したあとで「部落民でなくてよかった」と思い直し、それからもう一度差別を再認識して帰ってゆくでしょう。

藤村が小説「破戒」を描いたのも人間的な同情でした。拍手を送った読者も人間的な同情をよせるでしょう。そして、映画「破戒」のスクリーンもうまくいって人間的な同情を捲き起すこともありうるでしょう。しかし、この人間的な同情から生れるものはなんでしょう。またしても差別と差別と差別と。人間的な同情は、今日以後もう止しましょう。人間的な同情なんて優越する者の差別の言葉にしかすぎないではありませんか。

は、痛烈である。前述の「慟哭の心」も「憐れむといふ心」からも部落解放思想は期待出来ないと筆者が一言したのも右と同様の意味に於てである。マスコミに乗る文化財、文豪藤村の記念碑的問題作という事で、多くの読者を獲得しつづけてゆきそうな「破戒」に於ける、初版本復原という事について最後に述べてみたい。

前述の如く、主として水平社からの要請で藤村は昭和十四年に「破戒」を改訂した。それは例えば、次の如くである。

――同族の哀憐は、斯の美しい穢多の女を見るにつけても、丑松の胸に浮んで来た。人種さへ変りが無くば、……（傍点筆者）

が、改訂版では

――この美しい女を見るにつけても、いろ〳〵なことが丑松の胸に

浮んで来た。家柄さへ変りが無くば、……

と、なっている。つまり改訂の主旨は穢多という差別的文字を抹消する丈ではなく、同族とか、ことに人種という様な語は、穢多或は部落そのものに対する誤やまれる知識から出たもので、単なる職業的身分の差を人種の相違としているのはいけない、という程度にまで及び、この主旨は可成り行き届いている様である。その改訂の結果は、現在、昭和四十一年刊行の筑摩版「藤村全集・第二巻」の巻末に校異として掲げられ一目瞭然である。

改訂が改悪であるというのが今日一般の一致した意見の様であるが、かと言って、改訂版を採った新潮文庫はやめて、世間一般は、初版本に忠実な岩波文庫を読むべきだという事にはならない。初版本がいいか、改訂本がいいか。筆者は至極簡単に次の如く結論する。前述の如く、改訂の要素に、作品の芸術性の上での何ものもない「破戒」に於ては、改訂が文芸価値の上から言って改悪になるのはきまっている。その点については筆者は、逍遙の「小説神髄」の初版本復刊を、著者逍遙の不機嫌を買いつつも断行した、塩田良平博士に学びたい。つまり、明治三十九年に刊行された「破戒」は一つの歴史的事実であるという事に於て絶対の意味を持つ。

だが、現実の裏付けを欠いた明治四年の解放令は、穢多の名称すら解放する事が出来ず、新平民部落、という新しい差別名称を生み出して、今日に及んでいる。昭和の部落差別の事実に疑いを持つ人も、昭和二十四年以来、毎月刊行されている、雑誌「部落」（部落問題研究所発行）或は「部落―差別は生きている」（朝日新聞大阪本社社会部編・昭和三三年・三一書房刊）、「差別―部落問題の手びき」（東上高志著・昭和三四年・三一書房刊）等を一読すれば、その惨酷この上もない差別事実が、どの様な姿で今日の日本の社会に厳存するかが解る。

藤村は再刊の序（改訂版）に「これは過去の物語である」と書いた。「新しいといふことは、近代では恥づべき何物をも意味しない。さういふ中にあって、独り新しい部落の民のみが特別の眼をもって見られて来たのは何故であるか。わたしがこれを書いた頃の部落は、その実決して新しくはなかったのである。古い、古い部落であったのである」とも述べている。藤村は、何故であるかと書いているが「破戒」を読んでもそれは解らないので、昭和十四年にもなれば、いくらも水平社関係の書物もあろうというもの、藤村のとぼけた様な勿体ぶった態度には驚ろかされる。

「古い、古い部落」の「過去の物語」で、「曽てかういふ人も生き、又曽てかういふ時もあった」という様な藤村の文章を読むと部落差別の事実が何か遠い昔のお伽噺的存在の様に表現されているがとんでもない間違いである。この様な生々しい社会の現状を踏まえて、初版本、改訂本が読まれるべきである。「全集・第二巻」の巻末には、語註があって、「穢多」の語義につき詳しい説明がなされている。解放委員会の声明書をあわせ読んで、更に改訂個処にも注意を払って、初版本「破戒」は読まるべきではないだろうか。それでなくては「破戒」の今日的意義は見出す事が出来ない。今日的意義を失った作品は既に真の意味の古典ではないのである。古典をして真実の古典たらしめ、それを正しい位置に据えることこそ、我々の義務である。（完）